ストライク・ザ・ブラッド

STRIKE THE BLOOD

APPEND1

続・聖者の右腕／人形師の遺産

ー第二章ー

ストライク・ザ・ブラッド

STRIKE THE BLOOD

APPEND1

続・聖者の右腕／人形師の遺産

―第二章―

著／三雲岳斗

イラスト／マニャ子

第二章　媛と魔女の円舞曲（ワルツ）　— Waltz With The Witch —

1

モノレールから降りてきた若い乗客が、眩い青空に目を細めた。

すらりとした長身に、優美で華やかな顔立ちの少女だ。

彼女が着ているのは、関西地区にある名門女子校の夏の制服。左の肩に背負っているのは、キーボードを運ぶための黒い楽器ケースだった。

ポニーテールの長い髪が、強い海風に吹かれて揺れている。

獅子王機関より正式に六式重装降魔弓（デア・フライシュッツ）を与えられた攻魔師（とうましし）——〝舞媛（まいひめ）〟煌坂紗矢華（きらさかさやか）である。

「う！……暑（あつ）っつ……」

額の汗を拭いながら、紗矢華は苛々と溜息を洩らす。

彼女が訪れているのは絃神島（いとがみじま）。東京の南方海上三百三十キロ付近に浮かぶ、常夏の〝魔族特区〟である。カーボンファイバーと樹脂と金属と、そして魔術で造られた人工の大地が、亜熱帯の強烈な陽射しに炙られて、すでに初秋にもかかわらず、島の気温は四十度に近かった。

アスファルトの路上には、陽炎がゆらゆらと揺れている。

本土から到着したばかりの彼女の体力を、蒸し暑く湿った大気がじわじわと奪っていく。

「ハイテクな人工島っていうから少しは期待してたのに、なんなのよもう……暑いし、電車は混んでるし、暑いし、路線図は不親切だし、暑いし。おまけにこの道って、もしかして——」

周囲の建物を一瞥して、紗矢華は不安そうに唇を歪めた。

緩やかな上り坂に沿って建ち並んでいるのは、派手な装飾を施されたホテルの群れだ。旅行者向けの宿泊施設ではない。明らかに男女のカップルを意識した、いわゆるラブホテルというやつである。それに気づいて、紗矢華は軽く動揺する。

まだ昼間とはいえ、高校の制服姿の女子が一人きりでホテル街をうろついていたら、傍目にどんなふうに思われるか、想像するだけでも不愉快だった。

「ねえねえねえ、きみ、一人？　暇してる？」

「こんなところでどうしたの？」

そんな紗矢華の行く手を遮るように、たまたま通りすがった二人組の男たちが、唐突に声をかけてくる。普段からナンパ慣れしているのか、やけに馴れ馴れしい態度である。

「う……」

彼らの手首に装着された金属製の腕輪に気づいて、紗矢華は表情を硬くした。

それは魔族登録証と呼ばれる装身具だった。〝魔族特区〟の正式な住民であることを示す身分証であり、同時に生体センサーを内蔵した監視装置だ。すなわち彼らは普通の人間ではない。絃神島の全人口の約四パーセントを占めるといわれている〝登録魔族〟なのである。

もちろん魔族だからといって、彼らが人間に危害を及ぼすようなことは滅多にない。むしろ魔族登録証によって監視さ

れているぶん、一般人よりも安全という考え方もある。

とはいえ、相手が魔族だろうが人間だろうが、しつこくつきまとわれれば迷惑なことには変わりなかった。それでなくても紗矢華は獅子王機関の任務で単独行動中なのだ。魔族と関わり合いになって目立つような真似は、絶対に避けなければならない。

「……」

紗矢華は顔を伏せたまま、彼らを無視して、そのまま歩き続けようとした。しかし魔族の男たちは、素早く前に回りこんで、紗矢華の逃げ道を塞いでみせる。

「おおっと、どこ行くのさ？　ちょっと俺らと涼しいところで遊んで行こうぜ？」

「すみませんけど、急いでいるので」

「またまた、ちょっとくらい大丈夫でしょ。ていうか急いでるのなら送っていくよ。俺たち、この辺りには詳しいから」

「結構です」

「ねえ、ところで、きみ名前は？　荷物持とうか？」

「……」

強引に会話を続ける男たちにうんざりしながら、紗矢華は必死で怒りをこらえていた。

いかに登録魔族といえども、相手は単なるナンパ男。任務中の舞威媛が、本気を出すような相手ではない。なんとかして穏便に彼らをやり過ごし、上司との待ち合わせの場所（ポイント）まで、急いで辿り着かなければ——そんなことを懸命に自分自身に言い聞かせる。が、

その紗矢華の逆鱗に触れたのは、男たちの何気ない無神経なひと言だった。

「きみ、高校生でしょ？　背、高いね？　何センチ？」

男がその言葉を口にした次の瞬間、紗矢華の身体は自覚する前に動いていた。

男の顔面へと押し当てられた掌底が、零距離から強烈な一撃を叩きこむ。

「填星（ちんしょう）——歳破（さいは）！」

「へ!?」

紗矢華の攻撃を喰らった男は、自分になにが起きたのか理解する前に、完全に白目を剥いていた。そして、その場にへなへなと座りこむ。紗矢華が使ったのは八将神法（はっしょうしんぽう）——獅子王機関の舞威媛が操る無音暗殺術である。屈強な魔族の肉体といえども、脳を直接揺らされては意識を保つのは不可能だ。

「な……!?　お、おまえ、攻魔師か——!?」

仲間が突然やられたことに動揺して、もう一人のナンパ男が、慌てて腕の魔族登録証を引きちぎった。おそらく彼の正体は獣人種なのだろう。獣化して紗矢華に対抗しようとしたのだ。

しかし男が完全に獣化を終える前に、彼の動きは止まっていた。

恐怖におののく男の瞳には、巨大な刃が映っている。

背中の楽器ケースから取り出した銀色の長剣を、紗矢華が男の首筋に押し当てていたのだ。男が抵抗を続けるなら、紗矢華の剣は彼の喉をあっさりと斬り裂いていただろう。

恐怖に硬直した男のみぞおちに、紗矢華が乱暴な膝蹴りを放つ。

悲鳴を上げることもできないまま、二人目の男も悶絶した。

「これだから……！　これだから男は嫌いなんだけど！」

憤怒の形相のまま、紗矢華が吐き捨てるように独りごちる。

モデルっぽいといえば聞こえはいいが、女子にしては高めの自分自身の身長が、紗矢華には密かなコンプレックスなのだ。わざわざそれを思い出させてくれたナンパ男たちは、完全に意識を失って、彼女の足元に転がっている。

「……って、やばっ！」

さすがにやりすぎた、と紗矢華が後悔するより先に、遠くからサイレンの音が近づいてきた。

おそらく特区警備隊（アイランドガード）の保安部隊が、魔族登録証の異常を感知して駆けつけてきたのだろう。獅子王機関所属の攻魔師が、登録魔族相手に暴力を振るったとなると、間違いなく大問題になってしまう。それに気づいて紗矢華はダラダラと冷や汗を流す。

獅子王機関の舞威媛、煌坂紗矢華の絃神島での初任務は、こうして始まったのだった――

2

「まったく……こんな街中で、一般市民相手に〝煌華麟〟を振り回すとは、まったくなにを考えてるんだか。舞威媛の質も落ちたもんだね」

数時間後。意気消沈して歩く紗矢華の胸元に抱かれて、一匹の猫が説教を垂れていた。

しなやかな体つきの美しい黒猫である。瞳の色は輝くような金色で、細い首輪には同じ色の金緑石が嵌めこまれている。

しかし魔術に詳しい者が見れば、その猫が普通の生物ではないことに、すぐに気づくだろう。彼女は強力な遠隔術式によって動かされている使い魔なのだ。

「す、すみません。だけど、相手は魔族だったんですよ……！」

紗矢華は、猫に向かって弱々しい口調で言い訳した。

黒猫を操って喋っているのは、獅子王機関の特任教官である縁堂縁（えんどうゆかり）――すなわち紗矢華のかつての師匠だった。高神の杜（もり）を卒業して、正式な舞威媛の肩書きを与えられた今でも、紗矢華は彼女に頭が上がらない。尊敬しているから、というだけではなく、縁堂縁という人物の恐ろしさを、骨の髄まで叩きこまれているからだ。

「登録魔族は立派な一般市民さね。この〝魔族特区〟ではね」

その縁が、気負いのない洒脱な口調で言う。

紗矢華は拗ねたように唇を尖らせて、

「だいたい獅子王機関の出張所が、あんないかがわしい建物ばかりの地区にあるのが問題なんだと思うんですけど！」

「ほー……なにがどういうふうにいかがわしいのか、詳しく説明してもらおうじゃないか。あれはなにをするための建物なんだい？」

黒猫に悪戯っぽい視線を向けられて、紗矢華が、うぐ、と

声を詰まらせた。もちろん猫は、答えをわかった上で紗矢華に言わせようとしているのだ。もはや凄腕の呪術師というよりは、ただのセクハラ上司である。

そのくせ猫は不意に真面目な口調になって、

「あの土地は霊的な死角になってて、人払いの結界を維持するのに便利なんだよ。地形的に外からの呪術攻撃にも強いしね」

「はあ」

そうですか、と紗矢華はやる気なくうなずいた。〝魔族特区〟における獅子王機関の支所が、あんなラブホテル街のド真ん中に建っていたのは、いちおうそれが理由らしい。

「あの……それより私が呼ばれた理由を教えてください。さっさと任務を終わらせて、行きたいところがあるんですけど」

気を取り直しながら紗矢華がそう言うと、猫は不機嫌そうに目を細めた。そして首輪の隙間に挟んであった写真を、器用に紗矢華の前に差し出してくる。

「これは？」

「ザカリー・多島（タジマ）・アンドレイド――欧州ヒスパニア国籍の日系人。国際指名手配中の魔導犯罪者さね。通称は〝人形師〟」

「……〝人形師〟？」

「この男は凄腕の魔術師でね。特に生体操作を得意にしていたらしい。この男が調整した人工生命体（ホムンクルス）は芸術品と呼ばれて、今でも凄まじい高値で取り引きされてる。セビリアの大学では医療魔術の教授を任されていたそうだよ」

「大学の教授、ですか」

写真の中の男性を見つめて、紗矢華は軽く困惑した。

〝人形師〟の異名を持つ人物は、思ったよりも若い。白衣を羽織った長髪の男だ。不敵な自信に満ちた表情は、凄腕の魔術師という彼の評価を納得させるものだった。

「そんな人が、どうして魔導犯罪者に……？」

「この男はたしかに凄腕の魔術師だが、良心ってものが決定的に欠けていたのさ」

「良心？」

「こいつは自分の研究のために、二十名以上の人間と魔族を違法な実験で殺している。人工生命体（ホムンクルス）の犠牲者は、その十倍以上ともいわれてるそうだよ」

「んなっ……!?」

猫の素っ気ない説明に、紗矢華は呆然と息を呑む。単なる猟奇殺人犯と呼ぶには、犠牲者の数があまりにも多すぎた。もはや殺人事件というよりは大量虐殺だ。

「おまけに魔導犯罪者として指名手配されたあとも、アンドレイドに仕事を依頼する連中は後を絶たなかった。こいつが造り出す人工生命体（ホムンクルス）や機械人形（オートマタ）には、それだけの価値があるってことなんだろうさ」

「……その凶悪犯が、絃神島にいるんですか？」

紗矢華が硬い声で訊き返す。舞威媛である自分が、どうして突然、絃神島に呼ばれたのか、その理由がようやく理解できた気がした。

「先週、この島で捕まった密売人が証言したのさ。アンドレイドに、軍用機械人形（オートマタ）の部品を売った、ってね」

「軍用機械人形……」
「相手が国際指名手配中の魔導犯罪者なら、そいつの処分は獅子王機関の管轄だ。〝人形師〟が持ってる技術や顧客リストも、手に入れたいところだね」
「ザカリー・アンドレイドを見つけ出して確保するのが、私の任務なんですね」
そう言って紗矢華は、肩に掛けた楽器ケースの取っ手を強く握り締めた。
実験と称して数多くの命を奪った魔導犯罪者が、軍用機械人形の部品を手に入れたのだ。このまま彼を放置しておけば、ろくでもない結果を招くのは確実だろう。
「やれるかい？」
世間話のような何気ない口調で猫が訊いてくる。
もちろん、と紗矢華は力強くうなずいた。
対魔族戦闘に特化した剣巫と違って、獅子王機関の舞威媛は、呪詛と暗殺が本来の任務だ。現代の日本では実際に暗殺を行うような機会はないが、犯罪者の追跡や監視にも、暗殺者の技能は役に立つ。一般の警官では手に負えない凶悪な魔術師が相手なら、それを捕まえるのに、紗矢華よりも最適な追跡者はほかにない。
「では、任せたよ。少しは成長したところを見せておくれ」
「はい」
師匠の使い魔である黒猫に向かって、紗矢華は深々と頭を下げた。そして、ちらちらと上目遣いで、猫の瞳をのぞきこむ。
「あ、あの……それでですね、師家様。この任務が終わったら、有給休暇を、その、申請したいんですけど……せっかく絃神島まで来たから、雪菜の様子を見ていこうと思って」
猫の反応をうかがいつつ、紗矢華がおずおずと願い事を切り出した。
紗矢華の親友でもある元ルームメイトが、獅子王機関の任務で絃神島に派遣されたと聞いたのは、ほんの数日前のことである。噂によれば彼女は今、世界最強の吸血鬼とも呼ばれる第四真祖の監視役を命じられているらしい。それを知らされて以来、紗矢華は彼女が心配で、いてもたってもいられない気分だったのだ。
そんな紗矢華にとって今回の任務は渡りに船だった。さっさと事件を解決し、空いた時間で姫柊雪菜に会いにいく。一分の隙もない完璧な計画だ。
あとは上司である縁に休暇の許可をもらうだけ――だったのだが、
「……師家様？」
猫からの反応が妙に薄いことに気づいて、紗矢華は訝しげに顔を上げた。
紗矢華の腕に抱かれた猫は、みゃあ、と短く鳴いて退屈そうにあくびをする。いかにも愛玩動物らしいその仕草からは、先ほどまでの人間臭さは感じられない。
どう見てもただの猫である。主人である縁堂縁が使い魔との接続を切ったのだ。
「ちょっと、どうなってるんですか、師家様!?　私の有給の許可は!?　返事してください、師家様っ!?　馬鹿あああああ

あ――っ！」
紗矢華の必死の呼びかけにも、もちろん猫はなにも答えない。
街中で猫に向かって必死に叫び続けている紗矢華から、通りすがりの人々は、そっと目を逸らして足早に立ち去っていくのだった。

3

人工島北地区は、企業や大学の実験施設が建ち並ぶ研究所街だった。何層もの地下街が積み重なった、殺風景で未来的な地区である。
その片隅にある古い建物を、日傘をさした小柄な女性が見上げている。
豪奢なドレスと長い黒髪。人形のように整った顔立ちは幼い。美女というよりも美少女、あるいは幼女という形容がしっくりくるほどだ。
彩海学園の英語教師にして、特区警備隊の指導教官をも任されている国家攻魔官――〝空隙の魔女〟南宮那月である。
「旧スヘルデ製薬の研究所跡地、か……」
閉鎖された建物の入り口を見上げて、那月はつまらなそうに呟いた。
スヘルデ製薬は、欧州ロタリンギア王国に本社を置く製薬会社だ。彼らは人工生命体を利用した新薬の臨床実験を行うため、〝魔族特区〟に研究施設を持っていた。ただし景気低迷と採算の悪化を理由に、研究所はすでに閉鎖されている。
この建物は、その成れの果てである。
「おまえが調整されたのは、この建物で間違いないな、アスタルテ？」
背後を振り返って、那月が訊いた。
その質問に答えたのは、藍色の髪を持つ人工生命体の少女だった。抑揚の乏しい無機質な口調で、彼女は淡々と説明する。
「肯定。最終調整終了日は、私のキーストーンゲート襲撃実行日と同一です」
「なるほど、暁古城の証言どおりというわけか。あんな素人の高校生に出し抜かれるとは、特区警備隊め……失態だな」
そう言って那月は、苛立たしげに溜息をついた。
人工生命体アスタルテを連れたロタリンギア正教の殲教師が、絃神島の中枢部であるキーストーンゲートを襲撃したのは、ほんの十日ほど前のこと。アスタルテが操る人工眷獣にゲートを警備する特区警備隊は蹂躙され、人工島最下層への侵入を許してしまう。
そんな危機的な状況から絃神島を救ったのは、那月の教え子でもある第四真祖――暁古城と、彼の監視役として政府から派遣されてきた獅子王機関の剣巫だった。古城たちは、絃神島で起きていた魔族襲撃事件から犯人の正体を割り出して、殲教師の企みを知ったのだ。
そのとき古城たちが突き止めた殲教師たちの隠れ家が、この研究所の跡地なのだった。

「ところで、アスタルテ。おまえのその服装はなんだ？」
研究所の門をくぐる直前、ふと思いついたように那月が訊く。
アスタルテが身に着けているのは、就職活動中の女子大生を思わせる紺色の地味なスーツだった。サイズが合っていないのか、袖周りがぶかぶかで、可愛らしくはあるが、正直あまり似合っているとは言い難い。
「質問認識。人工島管理公社からの支給品と回答」
「臨時職員用の制服か」
淡々としたアスタルテの返事に、那月がフンと鼻を鳴らす。
「地味で無個性な服を与えておけば、おまえの正体を隠せるとでも思ったか。美意識に欠けた公社の職員どもが考えそうなことだな」
「〝美意識〟についての情報が不足。この服装の問題点についての補足説明を要求します」
かすかに首を傾げて、アスタルテが訊き返した。
那月は唇の端を吊り上げて笑い、
「おまえの服は、あとで私が直々に選んでやる、という話だ。私のアシスタントをやってもらうからには相応の服装というものがある。覚えておけ、アスタルテ。〝可愛いは攻撃力〟だ」
「命令受諾――」
馬鹿正直な態度で頷くアスタルテ。那月は満足げにうなずくと、研究所の敷地内へと足を踏み入れた。
殲教師がこの研究所を隠れ家にしていたのは、アスタルテの体内に植えつけた人工眷獣の調整をするためだ。そのとき使われた調整データの痕跡は、おそらく今もまだ所内のどこかに残されている。
ほかの魔導犯罪者の手に渡る前に、その貴重なデータを回収する――それが那月の目的だった。人工眷獣の危険性は、キーストーンゲート襲撃事件で証明されている。アスタルテのような存在が量産される可能性を、残しておくわけにはいかないのだ。
「……人工生命体用の調整槽か。思ったよりも大がかりだな」
研究所の実験区画に辿り着いた那月は、フロアを見回して顔をしかめた。
教会の聖堂を連想させる、天井の高い広い部屋だった。
そこに整然と並べられているのは、円筒形の水槽だ。高さ二メートルを超える水槽の中には、濁った琥珀色の液体で満たされて、廃棄された人工生命体の残骸が浮かんでいる。それはおぞましいというよりも、どこかもの悲しい光景だった。
「眷獣を人工生命体に植えつけるような器用な真似が、ロタリンギアの生臭坊主一人にできるとは思えん。協力者がいたと考えるのが自然だが――おまえの設計者になにか心当たりはあるか、アスタルテ？」
「否定。起動前の記憶はすべて抹消されています」
アスタルテが首を振る。無感動な薄水色の瞳からは、彼女の内心は推し量れない。
那月は静かに息を吐き、
「だろうな……それもオイスタッハに人工生命体の調整を依頼された何者かの仕業、ということか」

そう呟いて、彼女は不意に足を止めた。フロアに残る異臭に気づいて細い眉を寄せる。
「フロアの入り口で待機していろ、アスタルテ。この建物に近づく者がいた場合の対応は任せる。おまえの判断で行動して構わん。排除するなり捕まえるなり、好きにしろ」
「命令受諾」
那月の指示に従って、アスタルテが通路を戻り始める。
彼女をしばらく無言で見送って、那月はくるりと日傘を回した。アスタルテを追い払ったのは、那月のせめてもの心配りだった。感情を制御された人工生命体といえども、仲間の残骸が漂っているような場所を見るべきではない。
「さて……と」
制御端末の前に移動して、那月は機器の状態を一瞥した。
研究所の電源はまだ今も生きているらしく、モニターには調整槽の状態が表示されている。しかしそこに示された数字はすべてデタラメだ。プログラムが正常に動作していないらしい。
「データはすべて消されている……が、藍羽あたりなら、この状態からでも復元するかもしれんな」
モニターを冷ややかに睨め下ろして那月は呟いた。
那月の教え子でもある藍羽浅葱という少女は、人工島管理公社に高給で雇われた天才的なハッカーだ。ハードウェアさえ生き残っていれば、わずかな電子的な痕跡から、消去されたはずのプログラムを復活させることぐらいやりかねない。
「眷獣共生型の人工生命体を生み出す技術か。人工島管理公社の連中にくれてやるのも癪だが……どうしたものかな」
ふむ、と那月がめずらしく考えこむ。
人工眷獣の技術を魔導犯罪者に渡すわけにはいかないが、だからといって人工島管理公社に任せれば安心できる、というわけでもない。公社の人間が、その技術を悪用しないという保証はどこにもないからだ。
研究所内に残された機器を物理的に破壊してしまえば確実だが、問題は、那月が直接手を下すわけにはいかないということだった。那月は、公社の依頼でこの研究所の調査に来ているのだ。その彼女が自らデータを破壊するような真似をすれば、明白な契約違反である。無断で施設を破壊するには、それに足るなにかしらの大義名分が必要だった。
「……」
具体的な対応策を思いつかないまま、那月は施設の地下へと向かう。
金属製の隔壁をくぐると、不快な臭気が鼻を突いた。
薄暗い地下研究室の内部には、無数の医療機器やベッドが墓標のように立ち並んでいた。
「機械人形か……趣味の悪い真似をする……」
診療台の上にはバラバラに解体された人型の骸が、無造作に打ち捨てられている。
剥き出しにされた傷口からは、錆びた金属製の骨格や、プラスチック製の人工筋肉がのぞいていた。まるで人形の部品を使って生み出された、醜悪なアートを見ているようだ。
「いや……この手口、見覚えがあるな……」

診療台の上の残骸を眺めて、那月は小さく唇を歪めた。

生きているかのような精巧な機械人形を生み出し、それを容赦なく部品として使い捨てる冷酷な技師。そして、人工生命体に眷獣を植えつけるような凶悪な行為を、平然とやってのける魔導犯罪者。その条件を満たす人物の名を、那月は一人だけ知っていた。

だが、那月がその男の名を口にする前に、ギシリ、と金属の軋む音が聞こえてくる。

診療台に横たわっていた無数の機械人形が、那月の接近に気づいて、突然動き出したのだ。

「ほう……やる気か？」

立ち上がる機械人形の姿を見て、那月が獰猛に微笑んだ。

機械人形たちの瞳は真紅に輝き、その肉体のあちこちから、銃口や刃物が迫り出してくる。明らかな戦闘態勢だ。おそらく機械人形たちの主人は、追跡者たちを殺すための罠として、自らの作品をこの研究所に残していったのだ。

「三原則のせいで、自律型の機械人形は人間を攻撃できないはずだが――」

自らに向けられた銃口を見返して、那月は興味深そうに呟いた。

市販されている機械人形の起動コアには、第一非殺傷原則というプロテクトが施されている。その強固な安全装置がある限り、機械人形が那月を傷つけることはできないはずだった。

しかし研究所に残されていた機械人形たちは、なんの迷いもなく那月に向かって発砲した。撒き散らされた銃弾の雨が、那月の身体を引き裂く――と思われたその瞬間、彼女の姿は波紋のような揺らぎを残して、虚空に溶けこむように消滅していた。

そして前触れもなく、那月は機械人形たちの背後に出現する。

それでも機械人形たちは、ギシッと全身を軋ませながら、人間にはあり得ない速度で那月の動きに反応した。だが、そんな彼女たちの全身に、空中から出現した銀色の鎖が、凄まじい速度で絡みつく。

「やはり一点モノの自作コアというわけか。機械人形のコアを組み立てられる魔導技師――なるほど、アスタルテの設計者の正体がわかったな」

拘束された機械人形たちを眺めて、那月は気怠げに嘆息した。

完全に動きを封じられながらも、機械人形たちは動きを止めない。自らの関節を引きちぎるようにして、機械人形たちは強引に那月を攻撃しようとする。痛覚を持たない彼女たちは、自らの肉体が壊れてしまうことも恐れない。完全に破壊されて停止するまでは、主人の命令を忠実に実行し続けるのだ。

「貴重なサンプルだ。大人しくしていてもらおうか――」

那月はチッと舌を鳴らして、左手に持っていた黒いレースの扇子を振った。

その直後、糸が切れたようにガクンと機械人形たちの動きが止まる。

コトン、と硬い音を立てて床に転がったのは、精巧な回路に埋めこまれた鉱石の結晶だ。機械人形の起動コアである。空間制御の魔術によって、那月は機械人形の心臓部であるコアだけを、彼女たちの体内から抜き出したのだ。

「やれやれ、手間を掛けさせてくれたな――」

ドレスについた埃を払って、那月が短い溜息をつく。

起動コアを失った機械人形には、もはや那月を攻撃することはできない。研究所内に仕掛けられた罠は、これでひとまずは片付いたことになるはずだった。が、

「――っ!?」

新たな呪力の気配を感じて、那月は弾かれたように背後を振り返った。

暗闇の中に浮かんでいたのは、銀色の翅を持つ小さな蝶だ。わずかだが、蝶の身体から呪力を感じる。機械人形たちとは別系統の呪術だ。

それに気づいた那月は左手に持った扇子を振り、不可視の衝撃波を放って蝶を撃ち落とす。

薄っぺらな金属片へと姿を変えて、蝶の残骸は音もなく床へと舞い散った。

「式神……だと!?」

ちぎれた金属片を見下ろして、那月は忌々しげに唇を噛む。

銀色の蝶に、警戒するほどの戦闘力はなかった。単なる偵察用の式神だ。

問題は、その式神が那月を監視していたということ。そして那月にすらそれを気づかせなかったということだ。凄まじく高度な隠蔽能力を備えた術式と、それを完全に制御する熟練度――この蝶を操っていた術者はただ者ではないだろう。

「この気配……術者が近くにいるな……」

呪力の痕跡を逆探知して、那月がチラリと唇を舐める。

これほどの技量を持つ式神使いとの遭遇が、単なる偶然とは思えない。罠として残されていた機械人形たちのこともある。この式神使いも機械人形たちと同様に、那月の〝敵〟だと考えたほうが自然だ。

「ふん、面白い。調査の妨害が目的か――何者かは知らんが、私の邪魔をするというのなら、高くつくぞ、式神使い！」

〝魔族殺し〟の異名を持つ小柄な魔女は、吐き捨てるようにそう呟くと、冷え冷えとした殺気を漂わせ、美しく静かに微笑んだ。

4

「――私の式神が撃ち落とされた!?」

静電気に似た不快な刺激に顔をしかめて、煌坂紗矢華は低くうめいた。

呪術を破られた反動で、指先がかすかに痺れている。偵察用に放った式神が、目標に接近する前に一方的に撃ち落とされたのだ。敵の攻撃の正体すら、確認することができなかった。

「嘘でしょ……隠蔽化は完璧だったはずなのに……！」

そう呟いて紗矢華は、背負っていた楽器ケースから剣を抜く。

紗矢華がいるのは、〝人形師〟アンドレイドの潜伏先と思われる古い研究所の跡地だった。所内には〝人形師〟が仕掛けた罠が多数残されている。早い段階でそれに気づいた紗矢華は、迂闊に動き回るのを避けて、式神による隠密偵察に徹していたのだ。

しかし、式神が撃破されたことで、紗矢華自身の姿を隠していた結界も破れ、〝人形師〟の罠のいくつかが発動したらしい。研究所内に残されていた機械人形（オートマタ）が起動して、紗矢華に近づいてくる気配がある。

敵の数は全部で二体。銃器を内蔵した武装機械人形（オートマタ）だ。

「できれば使いたくなかったんだけど、そうも言ってられないか――〝煌華麟〟！」

銀色の長剣を振り上げて、紗矢華は柱の陰から飛び出した。

武装機械人形（オートマタ）が紗矢華に反応して、両腕に内蔵されていた機関銃を連射する。しかし紗矢華は、降りそそぐ銃弾に構わず、剣を無造作に振り下ろした。

〝煌華麟〟と名付けられた紗矢華の剣には、空間結合そのものを切断するという付加効果がある。あくまでも呪術的に再現しただけの疑似空間切断だが、そうやって生み出された空間の断層は、いかなる物理攻撃をも完全に遮断することが可能だった。機関銃の弾丸程度で、その絶対防御を撃ち破るのは不可能だ。

そして銃撃が途絶えた一瞬の隙を衝き、紗矢華の斬撃が機械人形（オートマタ）を薙ぎ払う。金属製の骨格ごと中枢部を破壊され、機械人形（オートマタ）はあっさりと動きを止めた。

続けて紗矢華は、壁越しにもう一体の機械人形（オートマタ）へと剣を突き出した。

空間そのものを斬り裂く彼女の剣にとっては、分厚いコンクリートの壁すら存在しないのと同然だ。起動コアを貫かれた機械人形（オートマタ）は、為すすべもなくその場に崩れ落ちる。

「とりあえず、これで邪魔者は片付いたけど……問題はさっきの魔術師よね……」

再び柱の陰に身を潜めて、紗矢華は乱れた呼吸を整えた。

紗矢華の現在地は、研究所の地下四階だ。敵の魔術師との距離は、まだ十分に離れている。今の銃声に気づかれたとしても、紗矢華の正確な位置を把握することはできないはずだ。

「あの魔術師も、〝人形師〟の仲間なの？　まったく……機械人形（オートマタ）の相手だけでも面倒だってのに……！」

ぼそぼそと口の中で文句を垂れつつ、紗矢華は再び式神を放った。

今回の目的は敵の正体を確認することだ。そのためなら敵に発見されても構わない。だからステルス性能よりも探知能力を優先した術式を組み上げる。

金属製の呪符は銀色のフクロウへと姿を変え、音もなく闇の中へと飛び立った。紗矢華が得意とする強行偵察型の式神である。が、

「――っ!?」

送り出して一分も経たないうちに、紗矢華の目の前で青白い火花が散る。式神が撃ち落とされたのだ。

「嘘……どうして!?　さっきまで西館にいたはずなのに……!?」

呪術の反動に耐えながら、紗矢華は必死で混乱した思考をまとめようとする。

二体目の式神が撃ち落とされたのは、最初に敵を発見した場所から二ブロック以上離れた場所だった。紗矢華が目を離したわずかな時間に、移動できる距離ではないはずだ。

しかし紗矢華が冷静さを取り戻す前に、冷たい手に触れられたような悪寒が襲ってくる。敵の探知魔術が紗矢華をとらえたのだ。

「呪力の残滓（ざんし）を辿って逆探知された!?　まさか、そんな――!?」

剣の柄を強く握りしめながら、紗矢華は愕然と息を呑む。

式神が残したわずかな呪力の痕跡を利用して、術者の位置を特定する。理屈はわかるが、それを実現するには凄まじく高度な術式の制御が必要だ。実戦でそんな高難度魔術が使える人間は、獅子王機関にすら数えるほどしかいない。

敵の魔術師の底知れぬ力量を思い知らされて、紗矢華の全身に汗が噴き出す。

「まずい……このままここにいたら……！」

焦燥感に衝き動かされて、紗矢華は通路へと飛び出した。

ほんの数秒前とは立場が完全に逆転している。今は紗矢華が監視される側なのだ。

しかし逃げ出そうとした紗矢華の行く手を遮るように、銀色の輝きが視界を横切る。

金属同士がぶつかる澄んだ音色が、薄暗いフロアに鳴り響く。

「く、鎖!?　いったいどこから――!?」

紗矢華の行く手を阻む輝きの正体は鎖だった。どこからともなく出現した銀色の鎖が、槍のように降りそそいできて紗矢華の逃走経路を塞いだのだ。

くっ、と紗矢華は唇を噛む。今の紗矢華は、鳥籠にとらわれた雛鳥も同然だ。このままでは嬲り殺しを待つだけである。

その間にも銀色の鎖は数を増やして、じわじわと包囲の輪を縮めていく。もはや迷っている暇はなかった。紗矢華は制服の胸元へと右手を突っこみ、つかめるだけの呪符をつかんで引っ張り出す。

「――響（かぎり）よ！」

そして紗矢華が祝詞を唱え終えた直後、竜巻のように渦を巻いた鎖が、彼女の全身へと絡みつき、その姿を完全に覆い隠した。

「手応えが……なかった？」

南宮那月が不機嫌な声で呟いた。

スヘルデ製薬研究所の一階。調整槽が置かれたフロアである。空間制御の術式を使って那月が放った攻撃は、間違いなく完璧なタイミングだった。

敵の式神使いの位置は完全に把握していたし、〝戒めの鎖（レージング）〟による包囲網に死角はない。那月の攻撃は、確実に敵をとら

えていたはずなのだ。
しかし那月の鎖が搦め捕ったのは、敵が造り出した新たな式神だけだった。咄嗟に生み出した新たな式神を身代わりにして、術者はまんまと那月の包囲を抜け出したのだ。
「手加減したとはいえ、あれを防ぐとはな……あの式神使い、何者だ？」
日傘を握る指先に力をこめながら、那月は愉快そうに口角を上げる。
鎖による包囲を破られたとはいえ、式神使いを見失ったわけではない。もう一度同じ攻撃を仕掛ければ、今度こそ確実に相手を捕らえることができるだろう。
そんな那月の余裕の笑みが、次の瞬間、困惑の相に変わる。
那月が探知していた敵の気配が、唐突に予想外の変化を見せたのだ。
「気配が分散した？　敵は一人ではなかったということか……？」
戸惑う那月を嘲笑うかのように、式神使いの気配が増えていく。ひとつの気配がふたつに、そしてよっつに――やがてその数は最終的に十六にまで分裂した。
ただでさえ難度の高い遠距離探査魔術を使っていた那月が、そのすべての気配を追跡し続けるのは不可能だ。
「アクティブ・デコイか……面倒な真似をしてくれるな」
敵の術式の正体に気づいて、那月が小さく舌打ちする。
式神使いは、自分と同じ気配を発する囮の式神をばらまくことで、那月の探査魔術を欺いた。呪術経路を探知されていることを逆手に取ってみせたのだ。
「咄嗟の思いつきにしては悪くない判断だが、無駄だ。まとめて潰させてもらう」
広げた扇子ごと、那月が左腕をゆっくりと振る。
わざと気配を発しているぶん、囮の式神の位置をつかむのは容易だった。いくら数が多くても、居場所さえわかっていれば攻撃するのは難しくない。
空間を自在に操る那月にとって、敵との距離や障害物は問題ではない。虚空から撃ち放たれる彼女の銀鎖は、研究所の階層を飛び越えて、式神使いの囮を次々に撃ち抜いていく。
囮は瞬く間に数を減らして、やがて最後の一体が消滅した。
そのときになって初めて、那月の表情に戸惑いが浮かぶ。
「本体を見失った……だと？」
囮にまぎれて逃走するのが、式神使いの目的のはずだった。
しかし破壊した十六体すべての囮の中に、術者本体はいなかった。
だからといって、十六体もの式神を同時に制御しながら、術者だけが自分の気配を殺して、移動できるとも思えない。呪術の原理上、それは絶対に不可能なのだ。
「最初の位置から動いていないのか？　だったら、なんのために囮を放った……？」
敵の思惑を理解できずに、一瞬、那月の動きが止まる。
それを狙い澄ましたようなタイミングで、敵が新たな式神を放った。
先ほどまでの偵察用の式神ではない。猛禽を模した攻撃用の大型式神だ。それは研究所内の通風口を利用して、正確に那月のいる場所へと迫ってくる。
「そうか、私の居場所を割り出すのが狙いか――！」
式神使いが放った十六体の囮は、単なる逃走用の目眩ましではなかった。あえて囮を破壊させることで、攻撃の起点と軌道を割り出して、那月の居場所を特定する――それが敵の本当の目的だったのだ。
「いい腕だ。だが、惜しいな――」
敵が放った攻撃型の式神が、那月のいる一階フロアに到達する。
だがその前に、那月は広げたままの日傘を無造作に振った。
その瞬間、彼女の身体は虚空へと溶けこみ、そしてまったく離れた別の場所へと移動していた。空間を操って八十メートルほど跳んだのだ。
「見つけたぞ、式神使い！」
そして那月は、再び敵の術者へと攻撃を放つ。強力な攻撃型の式神を動かしているせいで、術者は気配を消すことができない。敵が隠れている場所は完全に視えていた。
那月が空間を越えて放った銀鎖が、今度こそ式神使いを完璧に拘束する――
「な……に!?」
だが、術者の身体を捕らえたと思えた瞬間、銀鎖から伝わってくる手応えが消失した。それに気づいて那月の表情が険しさを増す。
「〝戒めの鎖〟を斬ったのか!?」
那月の攻撃にミスはなかった。だが、那月が放った銀色の鎖が、式神使いの反撃によって切断されたのだ。神々に鍛えられた〝戒めの鎖〟が――
そんなことができるのは〝戒めの鎖〟と同等の神気をまとった武器か、あるいは――
「空間切断能力……!?　何者だ？」
那月自身の攻撃によって、敵の周囲の空間が揺らいでいた。そのせいで式神使いの気配が追跡できない。完全に見失っている。
それはつまり、那月が敵を取り逃がした、ということだ。
「侮っていたか……いいだろう、ここからは本気でやらせてもらうぞ」
かつてない難敵との遭遇に、那月は我知らず微笑を浮かべる。

5

しなやかな長身を、狭苦しい非常階段の下に隠して紗矢華は心臓を押さえていた。
息を殺したまま敵の追撃がないことを確認して、ようやく胸を撫で下ろす。
「あ……ぶなかった……！」
長剣を握り締めた紗矢華の掌は、汗でしっとりと濡れていた。それほどまでに追い詰められた状況だったのだ。
あらゆる遮蔽物を無視して、空間の隙間から襲ってくる奇

怪な銀鎖。おそらくは名のある神器か魔具の類だろう。よりによってそんなものの使い手と遭遇するとは、まったく想定外の災難だ。

「なんなのよ、あいつ！　あんなのがいるなんて全然聞いてなかったんだけど！　これだから、師家様が持ってくる任務はイヤなのよ！」

気配を消すための結界を張り巡らせながら、紗矢華は深々と溜息をつく。

敵の攻撃を利用して姿を隠すことには成功したが、そのせいで身動きができなくなってしまった。どうにかして相手を無力化しないことには、研究所からの脱出すら不可能だ。

問題は、敵の正体が紗矢華にはなにもわからないということだった。相手が使う魔術の正体はおろか、紗矢華を攻撃してきた理由すらわからない。

「だいたい追尾式の式神が振り切られたって、どういうこと……!?　あいつの居場所は正確につかんでいたはずなのに――」

苛々と親指の爪を噛みながら、紗矢華は目標を見失った式神の制御を解除した。

紗矢華の式神は、間違いなく敵の位置をとらえていた。本物の猛禽と同じ速度で飛翔する攻撃型の式神を、人間が振り切ることは不可能だ。撃墜されたというのならまだしも、逃げられることなどあり得ない。

「使える囮はあと九体か。余裕はないけど、でも……！」

紗矢華は制服の胸元から、新たな呪符を取り出した。

式神の追跡を振り切るために、敵はなんらかの魔術を使ったはずだ。その術式の正体を確かめる。分の悪い勝負だが、どのみちこのままでは紗矢華に勝ち目はない。

自分自身の姿を模した七体の式神を作り出し、紗矢華はそれらを、バラバラの方向へと送り出した。手元には一体だけを残しておく。

今度の囮は、最低限の呪力だけを発生する隠蔽型だ。敵の目には、紗矢華本人が、気配を殺して逃走しているように見えるはずである。

「この距離でもまだ気づかれてない……向こうの索敵能力は、それほど高くないと見て間違いないわね。だったら――」

凄まじい緊張と重圧を覚えながら、紗矢華は式神の制御に集中する。今回の紗矢華の作戦は、タイミングが成功の鍵だった。ほんの一瞬の油断が、死に直結しかねない危険な賭けなのだ。

そして紗矢華の張り詰めた神経が、ついに限界を迎える寸前――

分散させた囮の一体が、銀色の鎖に襲われた。

鞭のように襲い来る鎖の一撃を喰らって、式神の身体が弾け飛ぶ。

「かかった……！　そこか！」

その瞬間、紗矢華も動いていた。

破壊される直前に、囮の式神は、攻撃を仕掛けてきた術者の位置をつかんでいた。その位置情報を使って、生き残っていた囮たちに敵への攻撃を命じたのだ。

式神たちを変形させて、人型から狼に似た猛獣の姿へと組

み立て直す。

呪力の消耗は激しいが、そのぶん式神の攻撃力と移動速度は桁違いに向上していた。それらが一斉に陣形を組んで、敵を包囲するように距離を詰めていく。

敵の術者がどれだけの移動速度を誇ろうとも、まともなやり方では、この包囲網から逃れることはできない。強引に包囲を破ろうとすれば、魔術を使わざるを得ないはずだ。それこそが紗矢華の望んだ状況だった。敵の術式を見極めるために、紗矢華がそれを仕組んだのだ。

だが――

「嘘!?」

背後からの突然の奇襲を喰らって、紗矢華の式神が破壊された。

続けざまに二体。そして、さらに二体。いずれも、まったく予期せぬ方角からの攻撃だ。

「なんなのよ、こいつの移動速度！　式神が……やば……っ！」

式神による包囲が破られて、紗矢華の作戦は呆気なく破綻していた。追い詰めていたはずの敵の魔術師が、包囲網の外側から式神たちを攻撃してきたのである。

すべての式神たちが破壊されるまで、十秒もかかっていない。あっという間の出来事だ。

咄嗟に床に伏せた紗矢華の眼前で、手元に残しておいた最後の囮が破壊された。引き裂かれた呪符に埋もれながら、紗矢華は祈るような気分で目を閉じている。

紗矢華の身代わりの式神をズタズタに破壊して、銀色の鎖は再び虚空へと消え去った。

予想を遥かに上回る敵の戦闘能力だった。紗矢華の小賢しい作戦を、相手は圧倒的な力で粉砕してみせたのだ。だがその圧倒的な力が、逆に敵の正体を明らかにしていた。

「間違いない、空間跳躍を使ってる！　そんな芸当ができる高位魔術師が相手ってこと!?」

はあはあ、と荒い息を吐きながら、紗矢華はゆっくりと起き上がる。

敵は空間制御魔術の使い手だ。練達者級の高位魔術師か、あるいは魔女――魔術の力量だけでいうならば、あらゆる面で紗矢華を上回る相手である。

しかし紗矢華は、獅子王機関の舞威媛。呪詛と暗殺の専門家だ。敵の正体さえつかんでしまえば、対抗する手段はいくらでもある。

「オーケー……それならそれでやりようはあるわ。獅子王機関の舞威媛を舐めないでよね」

紗矢華はそう言ってポニーテールの後ろ髪を払いのけ、新たな呪符を取り出した。

「動き出した……か。数が多いな」

新たに出現した式神たちの気配を察知して、那月は不興げに目を細めた。

個々の式神にこめられた呪力は、たいして強くない。完全

な囮を造り出せるほどの装備は、もう相手には残っていないのだろう。式神使いが操っているのは、偵察用の平凡な式神ばかりだ。

だが、その代わりに数が多い。式神の数は四十体近く。それらが一斉に散開して、那月を取り囲むように迫ってくる。

「探知発見を優先しての群狼作戦か。悪くない判断だが――」

那月は空間跳躍で、式神の包囲の外側へと移動した。

偵察用の式神たちは、放っておいて問題ない。警戒するべきは、雑魚の群れにまぎれこんだ攻撃型の式神だ。その数は、わずか四体だけ。おそらくそれが敵の本命だろう。が、

「無駄だ。私には包囲戦術は通用しないぞ。まず一体――」

那月は銀鎖を撃ち放って、正確に攻撃型式神だけを破壊した。偵察用の式神に那月の位置が特定されるが、そのときには那月はとっくにべつの場所へと転移している。

「この程度か？」

続けざまに、さらに二体の式神を破壊して、那月は拍子抜けしたような気分で呟いた。自分から攻撃を仕掛けてきたわりには、敵の動きはあまりにも単調だ。大量に放たれた式神たちも、ほとんど有効に機能していない。

「いや……簡単すぎる……私が空間制御を使うことにも、そろそろ気づいてるはずだ――」

理屈ではなく、本能的な違和感を覚えて、那月はうめく。そして最後の攻撃型式神を狙って、彼女が空間〝跳躍〟を仕掛けた直後――

「なにっ!?」

那月の視界を、凄まじい閃光と爆炎が埋め尽くした。炎が研究所の通路を見たし、四方からの爆風が彼女を襲ってくる。着地した那月のすぐ近くで、爆発系の呪術が炸裂したのだ。

「地雷原!?　これが狙いか――！」

立て続けに巻き起こる爆発に、那月が頬を引き攣らせた。大量に放たれた探査用式神の群れも、その中に紛れこませた攻撃型の式神も、すべては陽動に過ぎなかった。那月が最終的に移動する場所を予測して、敵はあらかじめ自爆するタイプの式神を敷設しておいたのだ。

普通に歩いて移動すれば、すぐに見抜ける稚拙な罠だが、空間を跳び越えてきた那月は、それに気づくことができなかった。那月はまんまと誘いこまれたのだ。

「やれやれ……この日傘は気に入ってたんだがな」

研究所の一区画を焼き尽くすほどの凄まじい炎が、那月の周囲を取り囲んでいる。

無数のレースをあしらった豪奢な日傘が、炎に包まれて燃え落ちた。

しかし那月は無傷だった。虚空から出現した二本の腕――黄金の鎧に包まれた機械仕掛けの巨大な腕が、彼女を包みこんで護っている。

それは魔女の〝守護者〟と呼ばれる、悪魔の眷属の腕だった。

那月はただの魔術師ではない。悪魔との忌まわしき契約によって、超常の力を手に入れた魔女なのだ。契約のの対価として与えられた〝守護者〟に、那月は常に護られている。それは、契約を破れば、たちどころに彼女の魂を刈り取る監視者でもあるのだが――

「この私に〝守護者〟を使わせるか。たいしたものだ」

口元の笑みを扇子で隠して、那月が愉快そうに呟いた。

いまだに燃え残る炎を衝撃波で消し去り、指先で虚空に魔法陣を描き出す。

「ならば次はこちらの番だな。呪符もそろそろ心許なくなってきたころだろう？　さあ、どうする、式神使い？」

6

頭上で膨れあがる巨大な魔力を感知しながら、紗矢華は薄暗い通路を走っていた。

焼けつくような焦りが、じわじわと紗矢華の背中を這い上ってくる。

なにしろさっきの攻撃は、手持ちの装備のほとんどを注ぎこんだ、とっておきだったのだ。それを敵が無傷で切り抜けるという事態は、さすがに想像していなかった。

「嘘でしょ……あの攻撃を防ぐなんて、いったいどうやって!?　空間制御術式を組み立てる余裕なんてなかったはずなのに――！」

髪が乱れるのも構わずに、紗矢華は階段を駆け上がる。

式神を作り出すための呪符は、もう何枚も残っていない。離れた距離からの撃ち合いでは、紗矢華に勝ち目がないことは明らかだった。残された選択肢はただひとつ――距離を詰めての直接攻撃だけだ。

問題は、敵の正体がいまだに判明していないということだ。が、それについて悩んでいる余裕は、紗矢華にはもう残されていなかった。

「見つかった!?　なによ、こいつら!?」

接近してきた異様な物体に気づいて、紗矢華は慌てて立ち止まる。

彼女を待ち受けていたかのように、仄明るく輝く獣の集団が、狭い非常通路を埋め尽くしていた。見た目は小さなクマのぬいぐるみに似ている。が、その数は少なくとも三十体以上――

それらが一斉に紗矢華に向かって、短い手脚を振り回しながら突進してくる。

「そうか、魔女の使い魔！　なんて数！」

魔力で紡がれた半実体のクマたちを見つめて、紗矢華はギリッと歯噛みした。

使い魔たちの体長は、三十センチにも満たないが、その一体一体に封入された魔力は、手榴弾数発ぶんにも相当する。これだけの数に一斉に爆発されたら、家一軒くらい楽に吹き飛ばす威力があるだろう。もちろん紗矢華の身体など木っ端微塵だ。

「まず……い！　このままじゃ……！」

迫り来るクマの集団に押されてじりじり後退していた紗矢華は、ついに通路の行き止まりに追い詰められる。それを見たクマたちが勢いを増した。

そのまま紗矢華を目がけて一斉に飛びついてくる。紗矢華

ごと自爆するつもりなのだ。

「こ、〝煌華麟〟――！」

クマたちが爆発する直前に、紗矢華は剣を振っていた。剣撃の軌跡が空間に断層を生み出し、衝撃をすべて使って最後の囮を生み出した。

同時に紗矢華は、残った呪符をすべて使って最後の囮を生み出した。

クマたちの第二波は、その囮を追って紗矢華の前を通り過ぎて行く。

最後のクマが視界から消えるのを確認して、紗矢華はへなへなとその場にくずおれた。〝煌華麟〟が生み出す防御障壁は、ほんの一瞬しか効果が続かない。少しでもタイミングが狂っていたら、紗矢華の肉体は今ごろ粉々に飛び散っていたはずだ。

だがその最悪の状況は、なんとか乗り切ることができたらしい。

「死……ぬかと思った……。でも、一瞬だけど、視えたわよ、あなたの正体！」

銀色の長剣を杖代わりにして、紗矢華はよろよろと立ち上がる。

使い魔を操っている魔力の経路を逆探知して、ほんの一瞬、術者である魔女の姿を知覚することができた。相手の居場所も今度こそ特定できた。

意外なことに魔女の正体は、十一、二歳ほどの小柄な少女だった。

顔立ちは作りもののように端整で、恐ろしく豪華なドレスをまとっている。そして幼い容姿には不釣り合いな、奇妙な威厳を撒き散らしていた。なんにしても普通の人間とは思えない。

「あれって、人形よね……ただの機械人形ではないんだろうけど……」

通常、機械人形が、魔術を使うことはあり得ない。だが、紗矢華が追跡している相手は、稀代の才能を持つといわれる〝人形師〟アンドレイドだ。特殊な魔術装置を内蔵した、新型の機械人形を用意していてもおかしくはない。

そもそも敵の術者が使う魔術は、普通の人間にしては強力過ぎるのだ。相手が特殊な機械人形だと考えれば、むしろそのほうが納得できる。

「とにかく相手が人間でないのなら遠慮する理由もないし、切り札を使わせてもらうわよ」

自分自身に言い聞かせるように呟いて、紗矢華は長剣を胸の高さに掲げた。

そんな彼女の手の中で、〝煌華麟〟が変形する。刀身が前後に大きく割れて回転し、そこに現れたのは強靭な弦だった。長剣から、美しいアーチを描く洋弓に形が変わる。

それが六式重装降魔弓と呼ばれる〝煌華麟〟の真の姿なのだった。

「チャンスは一度きり……ね！　上等！」

紗矢華は制服のスカートをたくし上げ、太腿に巻いていたホルスターから金属製のダーツを取り出した。そのまま右手を一閃すると、それが伸びて銀色の矢に変わる。

その呪矢を吹き抜けになった天井へと向けて、紗矢華は弓を引き絞る。

「獅子の舞女たる高神の真射姫が讃え奉る――」

敵の魔女がいる場所は捕捉できている。複雑に入り組んだ研究所の建物に遮られているが、それらの障害物を跳び越えて攻撃できるのは、なにも空間を操る魔女だけではない。要は、障害物すべてをぶち抜いて、呪力を直撃させれば済むことだ。

「極光の炎駒、煌華の麒麟、其は天樂と轟雷を統べ、憤焔をまといて妖霊冥鬼を射貫く者なり――！」

ありったけの呪力を流しこんで、紗矢華は呪矢を解き放つ。銀色の矢が轟然と大気を引き裂いて、美しい軌跡とともに飛翔する――

「とらえたぞ、式神使い――！」

新たな魔法陣を空中に描いて、那月が猛々しく歯を剥いた。式神使いの位置は、地下第三階層の非常通路。探査魔術を起動するまでもなく、凝縮された膨大な呪力の存在が伝わってくる。那月の使い魔であるクマたちの攻撃を、無傷で切り抜けてみせたらしい。

「疑似空間断層で、使い魔の攻撃を無効化したか。だが、そのやり方では、障壁の連続展開はできないはずだな」

そう言って那月は、レースの扇子を悠然と振り上げた。

式神使いが紡ぎ上げた呪力が、さらに密度を増していく。祝詞の詠唱による過剰な増幅を行っているのだろう。大規模な呪術を使うつもりなのだ。

だが、敵の術式の発動よりも、那月の攻撃のほうが速い――

「それとも四十九本の〝戒めの鎖〟の時間差攻撃――避けてみせるか？」

那月が扇子を振り下ろす。空間に目には見えない無数の亀裂が走り、銀色の鎖が撃ち出された。それらは目標である式神使いを完全に包みこみ、そして四方から一斉に搦め捕る――

「――なにっ!?」

勝利を確信した那月の表情が、驚愕に凍りついたのはその直後だ。

式神使いが放った攻撃が、凄まじい衝撃波を撒き散らして、那月の銀鎖を弾き飛ばす。

「っ……？　いや、鳴り鏑矢か！　なんだ、そのデタラメな霊力量は……!?」

凄まじい地鳴りで、建物全体が揺れていた。

気圧の急激な変化によって、鼓膜が苦痛を訴えてくる。式神使いの攻撃は、単に巨大な衝撃波を撒き散らしただけではなかった。その衝撃波が生み出す轟音を呪文の詠唱に変えて、気象にすら影響を与えるほどの巨大な魔術式を実行したのだ。

「まさか、この建物ごと私を吹き飛ばすつもりか――!?」

崩壊していく研究所を眺めて、那月は呆然と呟いた。

式神使いが使った術式は、大規模破壊用の呪術砲撃だ。本来なら、数十人がかりで実行する儀式魔術級の呪詛である。

たしかにそのレベルの攻撃ならば、障害物である壁や床をぶち抜いて、那月を直接狙い撃つことができるだろう。
さすがの那月も、自分がこんな手段で狙われるとは予想していなかった。
「この状況で空間跳躍は……無理か！　どうする!?　〝輪環王〟の封印を解くか……!?　だが……！」
放たれた膨大な呪力の余波で、空間制御の魔術が起動できない。封印した状態の不完全な〝守護者〟の力では、あの砲撃を完全に防ぐのは無理だろう。
しかし那月には〝守護者〟の封印を解けない理由がある。那月の〝輪環王〟は強力すぎて、迂闊に解き放てば、絃神島に甚大な被害をもたらす可能性があるからだ。
「教官――」
葛藤する那月のすぐ近くで、感情のこもらない静かな声がした。この期に及んでも無表情な人工生命体の少女が、那月の背後に気配もなく立っている。
「アスタルテ……!?」
「報告。大規模な制圧型魔導兵器の発動を感知。なんらかの対応が必要だと判断しました」
ふ、と那月が微苦笑を洩らす。独自の判断で行動しろという那月の命令を、アスタルテは律儀に守ったのだ。そして彼女のその判断が、那月の危機を救ったことになる。
「賛辞を実体化させろ、アスタルテ！　今すぐにだ！　責任は私が取る。全力でやれ！」
那月の命令に、人工生命体の少女がうなずいた。
式神使いの呪術砲撃が、那月たちの足元にまで到達する。だがそれよりも一瞬速く、アスタルテの背中から生えた虹色の翼が、那月たちを包みこんでいた。
「命令受諾。執行せよ、〝薔薇の指先〟――」

7

頭上には夕暮れの空が広がっていた。南国特有の鮮やかな夕景だ。赤く染まった陽の光が、舞い上がった砂塵と土埃をくっきり照らし出している。
肩に降り積もったコンクリートの破片を払いのけながら、紗矢華はのろのろと顔を上げた。
視界に映ったのは、半壊したスヘルデ製薬研究所の建物である。紗矢華の呪術砲撃によって、地下の大部分は崩れ落ち、地上部分もごっそりとえぐり取られている。まるで巡航ミサイルの直撃か、大規模な爆弾テロにでもあったかのような光景だ。
「やっ……た！　いくらなんでも、これなら――」
〝煌華麟〟を剣の形に戻して、紗矢華は安堵の息を吐く。呪術砲撃のタイミングは完璧だった。最大規模の熱衝撃波が、確実に魔女を巻きこんだ。どれだけ凄腕の空間制御の使い手でも、あれだけの霊力の余波から逃れることはできなかったはずだ。
敵の正体が最後までわからなかったのは残念だが、あれほどの強敵と遭遇して、生き残れただけでも上出来だろう、と

紗矢華は自分自身に言い聞かせると、
「えっ!?」
その紗矢華の身体が、突然ふわりと宙に浮いた。虚空から出現した銀鎖が紗矢華の手脚に巻きついて、そのまま彼女を吊り上げたのだ。
そして自由を奪われた紗矢華の前に、波紋のように虚空を揺らして人影がふたつ現れる。一人は藍色の髪をした人工生命体の少女。そしてもう一人は、豪奢なドレスをまとった小柄な魔女だ。
「う、嘘!?　無傷って……なんで……っ!?」
人形のような幼い容姿の魔女を見て、紗矢華は今度こそ絶句した。〝煌華麟〟の魔弾は、獅子王機関の舞威媛の切り札だ。それすらも通用しないとなると、もはや紗矢華に打つ手はない。
しかし魔女は魔女なりに、紗矢華の攻撃に対して思うところがあったらしい。紗矢華が握る長剣を見つめて、感嘆したように息を吐く。
「なるほど……今のが六式重装降魔弾――獅子王機関の試作型可変制圧兵器というやつか。使いこなせる術者がいなくて量産が見送られたと聞いていたが」
「あなた……何者？　どうして機械人形がそんなことを知ってるの……？」
強張った表情で、紗矢華が訊いた。暗殺者である舞威媛の武器の正体は、最重要の機密情報だ。魔導犯罪者が造った機械人形に、知られていいものではない。
が、機械人形呼ばわりされた小柄な魔女は、気分を害したように顔をしかめ、畳んだ扇子を紗矢華の額へと振り下ろした。
「痛ったあ……！」
謎の衝撃波を喰らった紗矢華が、思わず涙目になって悲鳴を洩らす。小柄な魔女は、冷淡な目つきでそんな紗矢華を睨みつけ、
「誰が人形だ、ポニテ猿」
「さ、猿!?」
いわれのない罵倒を浴びせられて、紗矢華が悔しげに唇を噛む。
「おまえは獅子王機関の舞威媛だな。ここに来た目的は、ザカリー・アンドレイドの確保か？　やはりアスタルテを調整したのは〝人形師〟だったようだな」
「あなた……アンドレイドの作品じゃないの？」
半信半疑の表情で、紗矢華がぼそぼそと訊き返した。
端整な顔立ちといい体型といい、目の前の魔女は人形にしか見えないが、たしかに機械人形や人工生命体にはあり得ない、妙な威厳とカリスマ性を感じる。そもそもこんな態度のでかい人形が、滅多にいるはずもない。
小柄な魔女は、宙吊りになったままの紗矢華を気怠そうに睨め上げて、
「私はこの建物の調査に来ていただけだ。人工島管理公社に頼まれてな。ロタリンギアの殲教師に蹴散らされて、特区警備隊は人手不足らしい」

「人工島管理公社の依頼って――」

紗矢華がハッと目を瞬く。紘神島に来る前に読んだ資料の中に、要注意人物として書かれていた名前を思い出したのだ。人工島管理公社に雇われた伝説的な魔女の名を。

「空間制御を使う魔女……あなた、まさか……南宮那月!?　魔族殺しの〝空隙の魔女〟!?」

「煌坂紗矢華……縁堂縁の弟子か。道理で手こずらせてくれたわけだ」

紗矢華の質問を黙殺して、南宮那月は一方的にそう呟く。那月が手にしていた身分証を見て、紗矢華は短く悲鳴を上げた。

「そ、それ！　私の攻魔師免許！　いつの間に!?」

「いちおう礼は言っておこうか、ポニテ猿。アンドレイドが残した人工生命体調整の手がかりは、できれば抹消しておきたかったのでな。おまえが研究所をぶち壊してくれて助かったぞ」

「は、はい……!?」

那月の言葉の意味が理解できずに、紗矢華は呆然と周囲を見回した。

スヘルデ製薬の研究所は、ほぼ全壊。もちろん、そこに残されていたはずの〝人形師〟の痕跡も、綺麗さっぱり失われている。それどころか人工島の構造部に与えた被害も、相当の金額になるはずだ。

「ちょ……ちょっと待って！　これ全部、私のせいにするつもり……!?」

声を上擦らせながら、紗矢華が訊く。那月は淡々とうなずいて、

「当然だろう。アスタルテ、戦闘記録は残っているな？」

「肯定。スヘルデ製薬研究所の崩落の主原因は、獅子王機関舞威媛が使用した制圧型魔導兵器によるものであると証明可能です」

「ち、違っ……！　たしかに直接の原因はそうだけど、そこに至るまでの過程が……ていうか、先に私の式神を撃ち落としたのはそっちでしょ！」

「ああ、そうだ。アスタルテ。今夜の夕食だが、やはり魚料理がいいな。人工島西地区に美味い舌平目を出す店があるらしい」

「わ、わざとらしく無視すんなっ――！」

とりつく島もない那月の態度に、紗矢華はほとんど半泣きになっている。

何度も死にそうな目に遭いながら戦った相手は、魔導犯罪者どころか、人工島管理公社の関係者。おまけに機密兵器である六式重装降魔弓を無許可で使った挙げ句に、追跡対象の痕跡ごと、建物をひとつぶっ壊してしまったのだ。始末書どころか、減給に謹慎、あるいは停職ものの不始末である。もはや有給休暇を申請するなどと言っていられる状況ではない。

落ちこむ紗矢華を呆れ顔で眺めながら、那月は気を取り直したように首を振り、

「さて……この研究所がぶっ壊れたことで私の用事は済んだ

わけだが、アンドレイドが絡んでるとわかった以上、このまま放っておくわけにもいかんな」
「放っておけない……って、どうするつもり？　〝人形師〟の確保は獅子王機関の管轄よ？」
紗矢華が投げやりな口調で警告する。
南宮那月の身分は国家攻魔官。警察庁管轄の彼女らと、特務機関である獅子王機関の攻魔師は、利害が対立することが多い。有り体にいえば仲が悪いのだ。
そして那月は、商売敵である紗矢華を蔑むように見返して、
「〝魔族特区〟に紛れこんだ魔導犯罪者の処分は私の仕事だ。貴様に文句を言われる筋合いはないな。行くぞ、アスタルテ」
「命令受諾――」
身動きのできない紗矢華に冷たく背を向けて、那月たちはそのまま立ち去ろうとする。
それを見た紗矢華はさすがに焦って、
「え!?　あ、ちょっと……こ、こら！　この鎖、解いていきなさいよ！　置いてかないで！」
やれやれ、と那月は心底面倒臭そうに振り返り、小気味よく指を鳴らしてみせた。
その瞬間、張り巡らされていた銀鎖が前触れもなく消滅し、投げ出された紗矢華は、ひゃっ、と悲鳴を上げながら落下した。思いっきり尻と背中を地面に打ちつけて、もはや文句を口にする気力もない。
那月はそんな紗矢華のことを、しばらく無表情に眺めていた。彼女が視線を向けていたのは、正確には、うずくまっている紗矢華の足元。コンクリートの床板だ。
「……アスタルテ、そこのポニテ猿の体重は見た目どおりか？」
「肯定。装備を含まない体重は四十九キロと推定」
那月の不躾な質問に、人工生命体の少女が即答する。あまりにも正確なその数字に、紗矢華は言葉を失って、
「な……な……!?」
「ふん。なるほど……おい、猿」
「ポニテですらなくなった!?」
あまりにも屈辱的な扱いの連続に、紗矢華の心は今にも折れそうだ。しかし那月の表情は、ぞんざいな口調とは裏腹にひどく真剣味を帯びている。
「そこの床を斬ってみろ」
「床……って、この下は人工島の構造部じゃないの？」
「いいからやれ」
「……はいはい、やるわよ。なんなのよ、もう！」
捨て鉢な気分になっていた紗矢華は、言われるがままに〝煌華麟〟を床に叩きつけた。研ぎ澄まされた銀色の刃が、コンクリートの床板になんの抵抗もなく深々と埋まる。
そして伝わってきた奇妙な手応えに、紗矢華も怪訝な表情を浮かべた。
建物の基底部にあるはずの、強固な構造材の手応えではない。床下にあったのは空洞だ。紗矢華が落下したときの振動音で、那月はその存在に気づいたのだろう。
「これって……隠し部屋？」

人間が入りこめるくらいの穴を穿って、紗矢華はその中をのぞきこむ。
想像していたよりも空洞は広い。研究所内にあった実験室と同等の規模である。内部には高価な実験機材が設えられて、人が生活できる程度の簡易な家具も置かれている。
「秘密の地下室……空間跳躍で出入りすることを前提にした機密区画というわけか。違法な研究をしている企業にありがちな仕掛けだが……術式はまだ機能しているようだな」
そう言い残して那月が姿を消した。地下室の中へと転移したのだ。
「ちょ……ちょっと待ってよ！」
紗矢華も慌てて飛び降りる。残されたわずかな手がかりだ。那月にだけ捜査を任せるわけにはいかない。
だが、地下室の中に入った紗矢華は、そのことを早くも後悔した。
たしかにそこは実験室だった。ただしまともな研究者のためのものではない。床や壁に染みついた濃密な血痕。開発中に廃棄された無数の機械人形たち。そして保存液に浸された奇怪な人工生物の標本――
普通の人間がここに半日も籠もっていたら、間違いなく精神に不調を来すだろう。それほどまでに異様で不気味な、狂気に彩られた部屋だった。
「この部屋……！」
「アンドレイドの工房だな。使われていたのは、そう長い期間ではないようだが……」
那月が露骨に嫌悪の表情を浮かべて言った。
紗矢華は、床に飛び散った血の痕を踏まないように、おぼつかない足取りで歩き回りながら、
「だったらここで待ってれば、〝人形師〟が帰ってくるかも……！」
そんな紗矢華の淡い期待を、那月は即座に否定する。
「いや……やつを待つ必要はなさそうだ」
「どうして？」
少し驚いて紗矢華が訊く。那月はなにも答えない。
小柄な魔女が無言で見つめていたのは、隠し部屋の片隅にあるソファだった。
やはりそこにも動きを止めた人型の骸が置かれている。だがそれは壊れた機械人形でも、廃棄された人工生命体でもなかった。
全身の水分を奪われて、カサカサに干涸らびた人間の死体だ。
擦り切れたジーンズと薄汚れた白衣を身に着けた男である。
その死体の特徴は、〝人形師〟――ザカリー・多島・アンドレイドと完全に一致する。
凶悪な魔導犯罪者であり、紗矢華が追跡するはずだった〝人形師〟は死んでいた。
完全に密閉された隠し部屋の中で。一人きりで――
「なによ……これ……!?　どういうことなの!?　いったい、誰が……」

紗矢華がかすれた声で呟いた。
外気に触れたせいなのか、紗矢華たちの目の前でアンドレイドの死体が崩れ落ちる。薄い煙を噴き上げながら、さらさらと砂のようにこぼれ落ちていく。
紗矢華は、無言で立ち尽くしたままそれを眺めていた。
恐怖に全身を震わせながら、ただ呆然と眺めていた。

To Be Continued...

ストライク・ザ・ブラッド
STRIKE THE BLOOD

アニメ『ストライク・ザ・ブラッド』第2巻初回特典付録
ストライク・ザ・ブラッド・アペンド1
続・聖者の右腕／人形師の遺産
―第二章―

著／三雲岳斗
イラスト／マニャ子
装丁・デザイン／根津典彦（G-SQUARE）
協力／株式会社KADOKAWA アスキー・メディアワークス
電撃文庫編集部

© 三雲岳斗／アスキー・メディアワークス/PROJECT STB

ストライク・ザ・ブラッド

STRIKE THE BLOOD

APPEND1

続・聖者の右腕／人形師の遺産

－第二章－

1000450789-B